IMAJ ニューズ
NO. 1
国際MRA日本協会機関誌
発行年月日　昭和50年7月20日（毎月1回）
発行所　国際MRA日本協会
発行者　柳沢錬造
（非売品）
INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

人が聴くとき神は語り
人が従えば神は働らく
人が変れば国が変る
——フランク・ブックマン

国際MRA日本協会 創立総会開かれる

最近の日本は、混乱、混迷の極にあるといっても過言ではない。

勿論、インフレと不況が同居するという、未だかつて経験したことのない時代を迎えているのであるから、無理もない、といえばそれまでであるが、それだけではすまされない根の深いものがある。

「この日本は、これからどうなるのか」、と、誰もが心配している。と同時に、それは政治が悪いからであり、誰かがなんとかしてくれるであろう、自分には関係ないと思っている。

そのようなとき、去る六月二十八日午後、東京の国会議事堂前の憲政記念館において、『国際MRA日本協会』の創立総会が開かれた。

この創立総会には、北は北海道から岩手県、茨城県、群馬県埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、愛知県、京都府、大阪府兵庫県から南は九州福岡県までの全国各地から各界の人々が参加して開かれ、定款の承認、事業計画の承認、役員の選出が行われ、新会長は土光敏夫氏を選出した。

また、創立総会の議事終了後記念講演として、村雲御所、瑞龍寺門跡、小笠原日英尼公貌下のお話も聞き、一同感銘を深くした。

総会の模様は次の通り。

開会の辞

鶴田重蔵

「昭和二十六年にMRA世界大会に参加して以来、MRA精神を基盤として仕事を進めている。今日ここに「国際MRA日本協会」の設立を迎えたことは喜ばしい。

これを機会に、MRA運動が一段と発展することを願ってやまない」

と挨拶し、議長に加藤シヅエ先生を選出した。

議長挨拶

加藤シヅエ

「MRAを生み出したフランク・ブックマン博士は亡くなったが、博士がいわれた『日本はアジアの灯台だ』といわれた言葉は、胸に深く残っている。

自分もアメリカのマキノの教会において、チェンジの体験をして、目を開くようになったことは、生涯における大きな体験であった。

本日の「国際MRA日本協会」の創立により、新らしい展開をすることができるであろう、これからは今迄のように、誰かがやってくれるであろう、という甘い態度ではなく、自分が主体的にやってゆくという姿勢が必要である。

どんなことがあっても、MRAから離れて生きることはできない、日本は、いまこそMRAを必要としている、自分もこの中で闘っていく」

と挨拶し、書記に、河本康太郎野中宗夫両氏を議長より指名した。

創立総会 式次第

一、開会の辞　鶴田重蔵
二、議長選出　〃
三、議長挨拶　加藤シヅエ
四、書記任命　河本、野中
五、経過報告　柳沢錬造
六、発起人代表挨拶　千葉三郎
七、祝電披露　榊　たか子
八、議　事
(1)定款採択に関する件　山崎房一
(2)事業計画に関する件　本郷富士子
(3)役員選出に関する件　佐藤　魁
(4)その他（意見発表）
九、新会長挨拶　杉田副会長
十、閉会の辞　寒河江善秋
記念講演　村雲御所瑞龍寺門跡
小笠原日英尼公貌下

経過報告

柳沢錬造

「昭和五十年という新しい年代を迎えて、これからどうなるのかと考えてみた。戦後、民主主義が入ってきて三十年になるが、問題ばかりが発生して少しも解決しない。要するに民主々義といっても、何が正しいか、のものさしによって決めるのではなく、自分の利益になることは賛成、不利になるものは反対となってしまった。

今日の日本は、羅針盤を失った船のようなもので、エンジンは動いて走っているが、どこに向って走っているのか解らない、危なくて乗っていられない。だからといって、私たちは誰一人この船から脱出することはできない。

MRAの創始者、ブックマン博士が「自分のあり方が国のあり方であり、国を変えようと思うならまず自分が変れ」と、言われたことを思い出し、沈みかけてゆく船の中で、自分の部屋だけペンキをぬって奇麗にしていてもだめだ。まず、この船を沈まないようにすることが先決であると、気がつき、MRAの運動を再展開することを決意し、四十六名の発起人で準備を進めてきた。

MRAは組織でもない、宗教でもない、絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛、の四つの道義標準を基盤にして、誰もが同じ立場で参加できる運動である。が、日本人の習性として、組織として運動する方がよいのでは、と考えて「国際MRA日本協会」として結成することにした。

日本の創立総会を機に、これからは皆さんが中心となって運動を進めていただくのであるが、それについて付言しておきたい。

(1)自ら聞くということ

組織としても、ひとりひとりが良心の声を聞いて実行することが、この運動の基本であること。

(2)人間として生きること

私たちは人間であって神様ではない、沢山の欠点がある、そうであればこそ、お互が欠点をつつくのではなく、助けあって勢力となって運動を展開すること。

(3)失敗を怖れないこと

新しいことをするときは、成功するか、失敗するか解らない、私たちは、この日本の国家と国民のことを考えて起ち上ったのである。失敗を怖れず、勇気をもって進むこと。

以上が、本協会の創立に当って、発起人の皆さんと語りあい確認した骨子である」

発起人代表挨拶

千葉三郎

「皆さんの努力によって、ここに創立総会を迎えられたことを嬉しく思う。今日は又、九州方面からも多数の方が参加されており感謝している。

今日程、MRAの必要性を痛感していることはない。先日も佐藤元総理がノーベル賞を受けるため、ノルウエーに行かれたとき、国王の待従長が「日本ではどうしてMRAをおやりにならないのですか、日本こそMRAの中心となる国ではないですか」といわれた佐藤さんも恥しい思いをしたと帰ってから報告された。

私は昨年来、あらゆる宗教の本を読んでみた、その数は九十八冊に及ぶ。本を読んでいる内に、ガイダンスの方法を息をはくとき、吸うときに無我の境地になれることを知った。ガイダンスの方法、人間性について、新しい現代のやり方を考えていただきたい。

皆さんや私たちが燃えて、「国際MRA日本協会」を創立したことは、これこそ「神の声」であると思う。」

祝電披露

榊たか子

「全世界に光を与えるアジアの灯台、日本のMRA創立総会を心からお祝します。

カナダにて

・ポール・キャンベル

ビル・エーガー

ホワイトヘッド」

「国際MRA日本協会が各界にわたる多数の方々の御賛同をいただき、ここに創立の運びとなりましたことは、発起人の一人といたしまして誠に喜びに堪えません。

埼玉県知事　畑　和」

「国際MRA日本協会の御誕生を心からお喜び申上げます。全世界に住む人、ひとりひとりがMRAの四つの道義標準を、勇気と情熱をもって実践することにより、平和な社会が築かれると確信致します。

九州MRA協力会　早田明由」

定款の採択

山崎房一

「MRAとは古くから関係していたが、MRAの訓練のお蔭で、今では多くの創造的仕事ができるようになった。

リーダーシップとは、自分で勝ちとるものではなく、周りが与えてくれるものである。アジアにおける日本も、このようにならなくてはいけない。

従って定款の目的と事業には、この主旨を盛りこんでおり、これからは理論ではなく実行の時代である。

○目的（第三条）は次の通り。

「この協会はMRA精神によって、わが国のあらゆる分野に道義革命を遂行し、すべての人々に真の生き甲斐と幸福を与え、家庭と社会の健全な発展に貢献する。

また、国際的に活動している各国のMRAチームと緊密に協力し、世界の道義革命の一翼をになうものである」

○会員（第五条）は

「この協会の会員は次の通りとする。

1、正会員――この協会の趣旨の達成に役割をもつ個人

2、賛助会員―この協会の趣旨に賛同し、その事業に協力する個人及び法人」

○会費（第七条）は

正会員（個人）　年額一口　五千円

賛助会員（個人）　年額一口　三千円

賛助会員（法人）　年額一口　五万円

その他は、別紙の定款（案）の通りであり、説明は省略したい」

役員選出

佐藤選考副委員長

「発起人会で選考委員会を設置し、その選考委員会を六月二十一日に開き、委員長に河原亮三郎氏を選出して協議した。

定款では総会で理事を選出して、その理事の中から常任理事などを選出することになっているが、最初のことでもあり、各界の意見を聞いて別紙のように、土光会長以下の役員を選考したので、御承認をいただきたい」

当面の事業計画

本郷富士子

①MRA世界大会派遣

スイスのコーの世界大会が、七月十三日から九月十四日まで開催されているので、次の方たちを代表団として派遣する。住友、鶴田両御夫妻、中島、大村、金森、藤田、河本の諸氏。

②来春のアジア大会派遣

昭和五十一年一月には、インドのパンチカニーでMRAアジア大会が開かれるので、今から準備を進めて、代表団を派遣する。

③MRAニュースの発行

月一回発行したい。

④研修会の開催

秋頃より実施できるよう計画したい。

国際MRA日本協会　役員

会長	土光　敏夫	理事	阿久津宗一　受田　新吉
副会長	加藤シヅエ　杉田　一次		太田　末男　大村　治
	千葉　三郎		久保　等　渋谷　良幸
理事長	柳沢　錬造		住友　義輝　高木　邦雄
常任理事	生尾　頼尾　井原　伸允		滝山　養　田子　富彦
	河原亮三郎　神部　英夫		塚本　三郎　戸叶　武
	寒河江善秋　榊　たか子		畑　千鶴子　日暮　兼一
	佐藤　魁　相馬　雪香		平位　勉　平沢　光人
	滝　真次郎　鶴田　重蔵		広瀬　栄一　藤森ひさ子
	徳光　憲　中島　勝治		山崎　房一　山村　貞雄
	中畑　三郎　西海図至夫		横田　昭
	福田　良勝　本郷富士子	監事	相馬　恵胤　二宮　秀夫
		顧問	十河　信二

意見発表

滝山　養（東京）

「私がMRAにふれたのは十河総裁の時代であった。当時労使正常化をやろうとして、MRAの劇のあと、当時の十河総裁と小柳委員長が握手して作られた。

いまの国鉄の急務は、財政再建であるといわれているが、そうではない。国鉄の問題は財政ではなくて「心」の問題である。

今迄は、誰が正しいかに観点があったが、これからは〝何が正しいか〟で、正しいことを勇気をもっていえるようにしたい。そのためには、自分で自信をもつことが必要で、心の中のくもりをなくすことであり、このことは国鉄のみでなく、日本全国に当てはまる。今日の総会で勇気づけられた」

川村　正（福岡）

「九州から七名のメンバーがこの総会に参加した。九州では昭和三十六年からMRA協力会を設立して、地味な運動をしてきた。

これからは、このMRA運動が日本の国内は勿論のこと、全世界に広めるため私もその役割をもちたい」

塩谷　猛（北海道）

「ブックマン博士は二十世紀の思想家だ、あれ程衝撃的人物に会ったことはない。

今日の感激を、善意と感銘に終らせてはならない。爆発的にしなければならない。」

平沢光人（大阪）

「いまの社会の混乱は、その責任が他人ではなく自分にあると考えている。爆弾事件も自分の体にできたデキモノと同じであり、現象だけみて取除いても不十分だ。

ある市長は、市長就任のとき、市に何を要求してもよい、だが、その前に朝五分早く起きて、自分の家の前を掃除してくれ、といった。自分の手で何かを行うことが必要だ」

藤森ひさ子（埼玉）

「四年前、十二名の人と共にコーに行きMRAを知った。翌年は主人が行き、その次は長男が二週間の予定でインドに行き、そのまま一年半残っている。

手紙で正月に帰りたいと思ったが、自分がホームシックになって帰国したのでは、自分の店に地方から来て働らいている従業員をどうして指導できるか、と思ったら、新たな勇気が湧いてきた、といって頑張っている。」

手紙の来る毎に長男は人間として成長しているのを感じ、親の私にできなかったことをMRAはして下さることを心から感謝している。

福田良勝（東京）

「二十年前、柳沢さんを通じてMRAを知った。夫婦ゲンカばかりしていたので、MRAの話をきいて反発を感じた。だが、二回目のときの、四つの道義標準を通して自分が如何に変ったかについての柳沢さんの体験談には衝撃を受けた。

自分も労金の貯金でヘソクリを作っていたので、良心が許さなくなって、その場でみんなに話した。その夜、その金を妻に渡した。私たち労働者が家庭で、職場でMRA精神を実践した記録で生れたのが、劇「一粒の麦」となった」

二宮秀夫（神奈川）

「MRAを知って、親との不和があっては社内も旨くゆかないと知った、税金をごまかしていたことで頭が痛かった、が、キチンと納めたら、物ごとがハッキリと見えるようになった。

人が変れば産業も変る、国も変ると知り、その気持で多くの人々に知らせるため経営セミナーを始め、二十七回となった。心と心のつながりが人と人とのつながりとなり、世界平和につながると考えている」

阿久津宗一（群馬）

「社会党の青年部全国会議の議長をしているときに、ノルウエーのイエンツ氏の話をきいてMRAを知った。MRAこそ、日本の将来を照らす光だ」

お知らせ

(1)　大集会の開催

スイスのコーにおけるMRA世界大会に参加された方々の報告会を兼ねて、来る九月十二日（金）午後六時より、東京駅前、日本工業クラブにて大集会を開きます。

(2)　事務所の開設

〒151　東京都渋谷区代々木一―三八　ミヤタビル　七〇五号

電話〇三（三七四）七六〇〇

国際MRA日本協会宛郵便物は、この住所でお送り下さい。

(3)　銀行の口座番号

第一勧銀代々木支店

一六三―一〇一四三三六

会費の送金は、上記口座に振込んで下さい。

記念講演

仏のご註文

村雲御所瑞龍寺門跡　小笠原日英尼公

ＭＲＡの精神と仏教の精神とは、ほとんど同じである。表現の方法が違うだけである。本当のものは一つしかないのであるから、当然であろう。

このＭＲＡ精神の中に「世界的視野に立って」とあるのが、大変有難い。日本人は島国根性で視野がせまい、最近は海外旅行のブームで、どんどん出てゆくが、旅の恥はかき捨てである。恥しいことである。

誰もが口にしているものに、公害、エネルギー、身体障害者の問題がある。みんな口にするし、集まって旗を振る、大声をあげている。そして国家が悪い、教育が悪い、誰が悪いと他のせいにしている、気も楽でよい。

自分の責任とは関係なく、他の責任としている。このことは大変なことだ。

子供が池に落ちた、柵を作っておかない市が悪い、市の責任だという。親の責任はないのか、子供を一人で遊びにやった親の責任をどうして考えないのか。薬を呑んだら体が悪くなった、薬を造った企業の責任だ、国家の責任だという。なんでも他に責任を転嫁する傾向がある。そこに問題があるのだといいたい。

ＭＲＡの人々のように、自己の責任として考えることは大変立派なことである、地味だが、これこそ本当の国宝人間だ。

いまは物質的成長ばかりをしてきたので、心が貪しくなっている。あらゆる場において何かを忘れている。

ＭＲＡでは道義といっているが、**仏教では仏性という**、仏の教えという。これがなかったら動物人間だ、人間は智恵があるだけ始末が悪い。動物人間が多くなれば世界は亡びてしまう。

だが人間は誰もそんなことはない、と思っている、誰かが代ってやってくれると思っている、この誰か、程はかないものはない。

人間は生きるために最少限、衣食住が必要である、集団生活をするので法律が必要となる。お金が必要になり、お金のために働らく、そのために尊い命をすりへらして働らく。

昔も、今もお金は大切だが、今は物が増えすぎた、そのためお金が沢山必要となってきて、お金のために命をすりへらしている。

本当の人間として何をしたらよいのか、何を働らいたらよいのか、本当の働らきがにぶってしまった。この頃は生命と物を同じに扱う。恐ろしいことである。

今こそブレーキをかけなくてはならない。このブレーキをかける運動、これがないとしたらおしまいである。

日本人は道徳的な人間であった。親が善悪の区別を教えた、躾をした。それがどこへいってしまったのであろうか。

筋を通すといえば昔もの、という、だが人間は心の奥底に、先天的に仏の心、神の心、良心がある。仏性がある。それは人間である以上誰もがもっている。

お釈迦さまは仏の教えを説くために出て来たものであり、お釈迦さまは人間として当り前のことをしなさい、というものがあのお経である。沢山のお経があるが目的は一つである。それは仏のご註文である。

仏のご註文とは仏性を発揮すればよい、この仏性をあると気がついている人、ほんの少し気がついている人、全然気がつかない人、と、いろいろの人があるが、誰もが持っている。

人間は誰しもウソをつく、悪いことをしてはいけないと知っているからウソをつく、悪いことをして何が悪いのだ、というようになれば救い難い。

人間は習慣づけるため、自分を一秒一秒コントロールしなければならない。**仏の心を習慣づける**。これができれば成仏するという。死んでから成仏しても仕様がない、生きている間に習慣づけなければ。

死んでからのために仏教があるなら、私達に関係ない、生きている人間に必要だから仏教がある。

周囲に誰もいないで、地球上に自分だけで生きているなら、何をしてもよい、だが、周囲にいろいろの人がいるので、自分の思うようにゆかない。

人間は精進しないで、よく見

てもらいたがる、自己顕彰慾がある、本当の偉い人は、世の中の人類を救ってゆく人だ。

「自分さえ良ければ」が強くなると他を排斥する、自分の目で相手を見ていては、相手は解らない。自分を捨てればよい、というと、自分を捨てたら個性がなくなってしまうではないか、という。紅茶を美味しくするのに角砂糖を入れると消えてなくなってしまう。消えてもその役割は果している。

利害損得を離れて、人のために働らくのは、歴史的にも一握りの人間しかない。だが、この人々が国を救い、世界を救ったのである。

仏は拝まれるために、出て来たのではない、亡くなった人のために、出て来たものでもない、**仏の説教は、生きた人間の自由のために説かれたもの**である。

自分も努力をし、人のためにも努力をする人を**菩薩**という。その**菩薩**のために、仏は道を説かれたもの。今日のMRAの総会に集まった皆さんは**菩薩**だ。

副会長挨拶

杉田一次

「MRAは第二次大戦前に、ブックマン博士が提唱したものであるが、今日の情勢は第二次大戦前とよく似て混迷している。今日程MRAの必要を痛感したことはない。

戦後、アメリカが日本を分折して、連合軍と四年間も闘った原動力は、①天皇制、②精強な軍隊、③教育、であると知った。それが占領政策となって現れた。その後アメリカは朝鮮戦争を機に一変したが、日本は変えなかった。

日本にとって、今こそMRAを考えなければならない、ブックマン博士は

○国家の指導精神に神の導きを入れること。

○国民の中に道徳の再武装を入れること。

をいわれた。

誰が正しいかではなく、何が正しいかで、会長以下全員が第一線の戦士として進む決意である。

閉会の辞

寒河江善秋

「しばらくMRAのチームから離れていたが、MRAの心から離れることはできない。今迄も一人でMRAを闘ってきた。何をやってもMRAに帰ってきてしまう。

MRAが教えてくれた、人を変えようと思うならば、まず自分が変れ、自分が変れば国が変る、世界も変るという基調は、生涯忘れることはできない。

ガイダンスをもってチェンジをした証をもつことは大切だ、正しいと思ってタバコをやめた、その証はいつまでも、もちつづけたい。」

これからの日本は世界の中で活躍しなければならない。
MRAは国際人をつくる。
みなさんが役者で、舞台は世界だ。

石坂泰造

「指導者は、人間が必要から貪慾に移り変っていく、その境界線に気がつかない、知らないでいる。だから無駄な闘争を指導する。この区別は指導者の道義的決意によって抹殺される前に民主々義者の心の中で死滅する」

「人間の改造」より。

インドは何を学ばなければならないか
――カンボチヤの陥落は インドへの圧力を増す――

ラジモハン・ガンジー

プノンペンの陥落、サイゴンの陥落は、一九四九年以来の共産主義者の一大勝利である。共産主義者が、カンボチヤ、南ベトナムで勝利したことは、必ずしも今後モスコー、北京、ハノイの誰が一番得をするか解らない。

カンボチヤの新政権は何れを選ぶか、シアヌークは「赤いクメール」は必ずしも全部共産主義者ではない、といっているけれど、果して、世界情勢は中立の政権を打ち樹てることが可能となるのか。

インドシナの状態は、今後ますますモスコー、北京、ハノイの三者の競争をみるであろう。ただここで銘記しなければならないのは、三者はカンボチヤ、南ベトナムを倒すためには、小異を捨て、一致したことを忘れてはならない。

次に一番危険にさらされるのはタイであり、その次はマレーシアである。マレーシアも潜在的な富をもっている。その次はシンガポールである。これら三国に圧力が加わる。モスコー、北京、ハノイはこのためには団結する。

インドに対する圧力も増す。国境をこえて武器を搬入してくることになろう、そして辺境地域の人々の不満をかきたてるだろう。内陸地域では、多くの場所で法秩序を乱す動きがある。

その目的は、法律と自由なる報道と国会の権威をゆさぶることによって、産業界にも圧力が加わり、労使関係に紛争がおき、民主々義を倒すことにある。

社会の不公正はあばきだされ、それを正そうとする努力は冷笑に付されるだろう。国民の信頼を得ている個人、組織は信頼を失うようにしていく。しかし、これらの戦略はインドでは成功しないとみている。

インドの民主々義は、相当の活力をもっていると私は思っている。例えば、インドシナから来た外交官が、インドの状況をみて、民主制度の根強いことをみて感心していた。彼は、共産主義者は一つの目的をもって行動しているのに、反対派は各自の物質的な利益に心を奮われていた、と語っていた。

最後に、インドに対していうことは、インドシナは自らの悲惨な出来事を通して与えている教訓をインドは十分学ばなければならない。インドの国境は確保されなければならない。このことは、単に訓練された軍隊を配置することだけでは足りない。

辺境地域の人々の心を勝ちとる政策をもたなければならない。例えば、アッサム地域、及び東北の人達が中央政府にもっている疎外感を取り除かなければならない。インドのあらゆる地域の行政にみられる、腐敗と無気力とは取り除かなければならない。

そのためには、汚職は勇敢に処罪されなければならない、不正をとるものには、ハッキリとした態度をとらなければならない。同時に、正直で勤勉な者に対しては、当然の報いを受けるようにしなければならない。

汚職、腐敗、不正義に対しては、これを暴露し、打倒するだけでは足りない。そのことによって作り出される不信頼、猜疑心が逆に情勢を硬化させてしまう。

事実がハッキリしないのに、競争相手を誹謗するのは大衆に仕える道ではない。他を誹謗するのに責任をもち、控え目にすること、一度不正が明らかになったときには、すかさず即座に行動することが必要である。

一九四七年インドが独立したときには、多くのインド人は資本主義、共産主義の何れにもみられるような欠点のないインドの誕生を願ったものである。

この目標は、今後も、たとえ困難があっても闘わなければならない。その闘いは、国会に、裁判所に、新聞紙上に、一般家庭、職場でも同じである。

真実と勇気と責任が、われわれの生活の中心にならなければいけないのである。

国際MRA日本協会事務所
住所
〒一五一
東京都渋谷区代々木一三六
ミヤタビル 七〇五
電〇三(三七四)七六〇〇
責任者 柳沢 錬造